第 20 回スタディツアー　感想

2020 年 1 月 28 日～2 月 8 日

「バングラデシュに行く目的は何？」と聞かれるのは困る。「貧しい人たちのためにボランティア、いいことされていますね。」と言われるのも嫌だ。

ぼくはスタディツアーに行けば、いつも自分のダメな点ばかり思い知らされている。「自分探しの旅」などと言う人もいるが、自分のダメなことを見せつけられる旅、というのが当たっている。

英語がしゃべれない、ましてベンガル語も。そして近頃は日本語もあまりしゃべれなくなった。岡さんも大西さんも、ベンガル語を習って覚えようとしている。習ったベンガル語を積極的に使って交わろうとしている。すごいなあと思う。ぼくは人と話すのも苦手だし、言葉を覚えようと努力することもしない。

岡さんは、２年から５年までの生徒の名前を覚えている。前回から生徒の名札をアルファベット表記で作ってくれた。しゃべれないぼくは、名札を見て名前を呼びかけることしかできないが、それだけでも大変役立ってありがたい。最近は認知症になってきたのか、子どもたちの名前も、先生方の名前さえも忘れて思い出せない。

ジョークができないぼくは、きっと皆から見ると面白みのない人だと感じるに違いない。せっかくタリクさんが前回から「お金持ちさん」と呼んでくれるのに、ニタニタ笑っているだけ。「お金持ちではありません。小金持ちです」と、笑って言って返せるぐらいのことができたらいいのに。陽子さんは「かけがいのない人」で、皆が爆笑している。拓海くんは「姫路のお城さん」「今度来るときは姫路城を持って来て！」などと言われて楽しそうだ。

岡さんと岡くん、二人の「おか」がベンガル語の「ポカ（虫)」と音が似ているから“ポカ、ポカ”とタリクさんが喜んで呼ぶ。ポカは虫、そしてテラポカはゴキブリ。そんな話で盛り上がっている時、ぼくのあだ名がゴキブリだったのを思い出していた。定時制高校で担任をしていた時、家庭訪問をしたり、職場訪問をしたり、生徒と一緒に遊びに行ったりして、いつも生徒のまわりに顔を出しているので「ゴキブリ」だ。嫌がられながらも親しみも込めて呼ばれていた。

そんな話を自分の口から皆に言って楽しい話の輪を作ればいいのに、翌日になって、大西さんからゴキブリのあだ名を解説付きで皆に話してもらう、間の悪いこと限りなしだ。

今回で、スタディツアーは 11 回目にもなる。それなのに一人で行動できない。“金魚の糞”みたいに皆に着いて行くだけ。陽子さんや拓海くんは、自由時間に一人でダッカやコミッラの町を歩き、買い物し、知人に会いにも行く。

言葉がしゃべれない、ジョークの輪に入れない、子どもの名前が覚えられない。今回は、写真撮影が得意の拓海くんもいて、ぼくのできる役目は支援物資運びぐらいになってしまった、といじけている。ぼくにとってのスタディツアーは、そんな落ちこぼれの自分を思い知らされる旅なのだ。

それなのに、やめますとは言えずに、ちょっと照れながら「シーユ

ー　イン　ジュライ！」と言ってしまっている。

バングラデシュの料理が好き。バングラデシュの子どもたちが好き。我が身ひとつの力で生きているバングラデシュの人たちが好き。50 年前の子どもの頃みたいな質素な暮らしぶり、粗末な家にボロボロの車、デコボコ埃まみれの道路事情が不思議と落ち着くのだ。

ワンドロップ小学校の子どもたちの笑顔は本当に素敵だ。家での暮らしは、着るもの食べるものにもこと欠き、14，5 歳にもならないのに嫁に行かされる子、学校をやめさせられて働きに出される子……、そんな子らが学校にいる時間は過酷な生活を感じさせない笑顔を見せてくれる。

しゃべれないぼくに「ヤマナカ、ヤマナカ！」「ヤマナカグループ！」と呼びかけてくれる。カメラのレンズに笑顔を振りまいてくれる。買物体験では孫のようなかわいい女の子が手を繋いでくれて、おじいさんのぼくを気づかってくれる。買物体験で買ったお菓子をぼくらに分けてくれる、いじらしい。ぼくは、子どもたちの可愛い笑顔をいっぱい感じているから、やめられないのだろう。

笑顔を見せることもできない子、生きていくために嫌な顔をしなければならない子……、スタディツアーの 10 日間ほどの間に、ぼくに見えていない子らの顔、見ていても心に留めることなくやり過ごしている子らの顔もあるだろう。けど、そんな子らの顔を思い浮かべても、ぼくはバングラデシュの子どもたちに心魅かれているのを感じる。

〈３階の校舎、完成まぢか〉

ワンドロップ小学校は、義務教育５年生まで 100 人の学校になった。３階の工事がどれくらい進展しているか気がかりだったが、林の向こうに学校の赤い屋根が見えた時、おとぎ話の一ページに出てくる家のように感じて可愛かった。

５年間の学校生活を積み重ねてきた最上級生はもちろん、４年生～２年生も皆それなりにしっかりしているのが感じられる一方、新入生は本当にあどけない子どもでかわいい。

マジュンダー・ワンドロップ小学校は、国から公的に小学校として認定される見通しが立ったらしい。しかし、卒業認定の試験に合格しなければ、正式な小学校卒業とはならず、上の学校にも進学できない。合格者の割合が規準より低かったら認定を取り消されることになるとか。合格者が少なかったら困るというので、先生方は、５年生には認定試験までの半年間、特別に指導できる人を雇って欲しいと申し出ている。

バングラデシュでは教育環境が悪く、二部制で午前か午後のどちらかにしか勉強できない。一クラスの生徒数も多く、学校では十分な教育ができない。だから、その学校の先生が塾の先生になって生徒を教えてお金を稼ぐらしい。生徒は塾に行かないと上の学校に進めないというのが現実のようだ。

ワンドロップ小学校の在り方はどうなのか。ここでは、いわゆる英数国社理の勉強だけでなく、音楽や美術などの芸術的な分野やスポーツなどもあって、楽しく活き活きと学ぶことができる。5 年間の学校生活を楽しく過ごして、子どもたちはもちろん、その親や家族が学ぶことの楽しさ、大切さを感じてくれるのが一番のねらいだと思う。

20 人のうち何人が卒業認定されて上の学校に進学できるか。そしてその内の何人かがミナコ奨学

金の奨学生となって力を伸ばしてくれればもちろんいいが、それができなくて５年間だけで終わることになってもいい。その子にとってその 5 年間がとっても貴重なものになってくれるだけでいいと思う。

「ワンドロップ」一粒の水滴のささやかな支援という言葉だけ聞くと、何かきれいごとで自己満足のようにも思うが、毎回スタディツアーに行って子どもたちを見ていると、この一粒ひとつぶがワンドロップ小学校の生徒一人ひとり、というようのが実感できる。

かしこそうな子、しっかりした子、かわいらしい子、ちょっとわがままな子、おとなしくて引っ込み思案の子……、そんないろんな子の顔が、「ワンドロップ」一粒ひとつぶの水滴のように感じられるのだ。

〈うれしい出会い〉

「邂逅（かいこう）」という言葉があるが、何か不思議な出会い、巡り合わせを感じた出来事がいくつかあった。

ミナコ奨学生だったシャヒダさんがワンドロップ小学校の先生になっていた。奨学生だったとき、学校に行ってない期間があったのに、そのことは内緒にして奨学金を受け取っていたこともある子だそうだ。ともあれミナコ奨学金を受けた人が、そのおかげで勉強できて先生になった。それもぼくらのワンドロップ小学校の先生になってぼくらの前に現れた。教師としてはまだまだ勉強不足だそうだが、こんな出会いは本当にうれしい。ワンドロップの一粒の水滴が、大きな光になったように感じられた出来事だった。

もう一つの出会い。

タリクさんのマンションのお手伝いさんが、ロケアからショティーになっていた。ロケアはタリクさんの家で世話になって家事を身につけたり、字を教えてもらったりして、将来は幸せな人生が開かれるのだろうと気楽に考えていたが、現実は厳しい。家族の世話をするため、今は遠くチッタゴンの縫製工場で長時間、低賃金で働いているらしい。

ショティーはワンドロップ小学校の生徒だった。今の５年生と一緒に入学したが、家庭崩壊のため家を出され、コミッラの町でさまよっていたところを、ロケアの前にお手伝いをしていたレナさんが偶然見つけた。タリクさんにお願いしてロケアの後のお手伝いさんにしてもらえたというのだ。

ショティーはワンドロップ小学校で 2 年の途中まで？勉強していたが、その後の生活は悲惨だった。食べるものもなくてひもじい生活をしていたため、タリクさんの家に来てからも、体がお肉を受け付けず食べられないという。

ワンドロップ小学校の入学式、運動会にはショティーも手伝いに来た。もとの同級生と顔を合わせるのはつらいことだろうけど、みんなと笑顔で接していた。そのけなげさに心を打たれる。

学校を途中でやめたあと身寄りもなくて町をさまよい、食べるものもない現実にあった彼女がタリクさんの家にお世話になることができた。こんなめぐり合わせは偶然のこととはいえ、タリクさん家族のやさしさ、そして、ワンドロップのささやかな活動があったから故にもたらされた幸運の

ように感じられた。
　ショティーのことは、どこかで見たことがある子だ、というくらいにしか覚えがなかったが、ヤスミンさんが来て彼女を目にしてすぐ、「なぜこの子がタリクさんの家にいるの！」と驚いたらしい。ワンドロップ小学校の運動会で出されたランチを食べていない子がいた。「なぜ食べないの？」と聞いたら、「家に持って帰るの」と言った子がいて、よく覚えていたのだという。それがショティーだった。
　ヤスミンさんには見えていたものが、ぼくには見えていない。人のことをやさしく気づかう心が足りない。ちょっと胸が痛い。

〈もう一つの、めぐり合わせ〉

　校庭にぼんやり立って校舎内の様子をうかがっている男の子がいた。鈍感なぼくは、どこかで見かけた子だとは思いながら、近所の子が来ているのだと思っていた。恥ずかしそうに、うらやましそうにじっと見ている。村の子が興味しんしん、のぞき込むというようでもない。
　気がついた大西さんが話しかけたら、この子はワンドロップ小学校の生徒で、２年前、親の意向でイスラムの宗教学校（マドラサ）に強引に転校させられてしまったムバラクだった。母親は別の男と逃げ、父親は精神を病んでいるとか。今は近所に住んでいる５年生のティンニの母親が彼の面倒を見ているらしい。
　ティンニのお母さんを学校に来てもらって面談し、親代わりになってもらうことで彼は２年生に復学することができた。
　ムバラクは無表情で笑顔がない。見ていて痛々しい。きっと家族の愛情を受けることが出来なかったために、心が縮こまってしまっているのだろう。親の無責任、身勝手さは非難されるところだが、そのことよりも、楽しく明るいワンドロップ小学校に戻れたのは、本当に幸運なめぐり合わせだと感じた。

〈ちょっと寂しい別れもあった〉
　ぼくの奨学生だったフマヤンとポーリーのこと。フマヤンは順調に進級、進学ができなくて、いったん仕事をしたりもしたが、それでも勉強をしなければ自分の将来の道が開かれないと決心していた。その決心を見た上で奨学金再開をしてもよいと思っていたが、結局学校はあきらめて働くことにしたらしい。何を考えているかはっきりしない、でも誠実そうにも感じられる顔が思い浮かぶ。残念なことだ。
　ポーリーは、まだ 15 歳にもならないのに、家の事情で結婚させられることになったらしい。前回は、お母さんが脳梗塞で倒れたそうで心配していた。いつもは暗い表情の彼女が、明るい表情で「ありがとう」と声をかけてくれた顔が思い出される。シアタースクールでいつもダンスのメンバーの一人に選ばれて踊っていたから、それなりの演技者の道に進んでいけたらいいと願っていたが、残念だ。
　フマヤンもポーリーも、その後どうしているか事情が分からないまま切れてしまうのは悔やまれる。

ワンドロップ小学校では、５年生でしっかり者だったアドリも家の事情で働きに出されてもう顔を見ることが出来なくなった。ミナコ奨学生のモリアムも結婚させられたという。

前回は、奨学生だったモビアや松葉杖のハレマが結婚させられたと聞いた。その後のことは、ぼくらには知る手だてもない。さびしいことだ。日本人のぼくらが想像もできないような厳しい現実があるのだろう、と思うことしかできない。彼らにも、幸運なめぐり合わせに出会えることを願うしかない。

〈重い決断〉

コミッラの奨学生のジュモンのこと。２年間里親への手紙がない。年２回の面接にも来ない。成績も不明。本人と会えない事情もよく分からない。前回のスタディツアーでは、本人と会う約束ができたその前夜、自転車事故で頭に血が溜まって症状が悪化し、ダッカの救急病院に運ばれた。やむなく、おばさんとお姉さんに会って奨学金を渡した生徒だ。

今回も、面接には来ない。彼の事情もよく分からないまま。タリクさんは、ジュモンの家庭の事情や本人の人柄などから、信頼できるので奨学金が必要であることなどを強く主張している。しかし、大西さんは、この状態で何も分からないまま奨学金を続けることはできないと突っぱねた。二人の間にはいつもの笑顔が消えて緊迫した空気が漂った。大西さんは、奨学金は支援者と奨学生、家族との信頼関係があって支給されるものであること、そしてそのお金は生活支援ではなく教育支援に活かされるものでなければならないという原則を譲らない。

タリクさんと大西さんはお互いの考えを激しくぶつけ合い続けた。傍で見ていてハラハラする場面だったが、タリクさんはちょっとの間をおいて、苦笑いを見せたあと、いつもの笑顔にもどった。激しい口論をしても、二人の間に築かれた信頼関係は揺るがない。

ジュモンは、交通事故で頭に金属が入っている。そして、家のために本人が働かなければならない状況にあるらしい。もし、この支援がストップしたら彼の命に関わることになるかもしれないことを考えれば、この決断は重苦しい。ぼくは自分で決断できずに、大西さんの決断の後追いをするだけだけど、いい加減なところで妥協すれば、ワンドロップの支援の質が台無しになってしまう。いつも思うことだけれど大西さんは苦しい立場にあっても重い決断ができる、すごい人だと思う。

軟弱なぼくは、この決断に言い訳するように考えたことがある。

ミナコ奨学金制度は教育支援であって生活支援ではない、という原則は分かる。しかし、人の命に関わる状況の場合、個別の信頼関係がしっかりあった上でなら、ぼくは特例として緊急に生活支援をしてもいいと考える。ただ、今回はあまりにも事情が分からなさ過ぎる。タリクさんを通して間接的に伝わる情報しかない。会いに来られない事情があるなら、ぼくらが出かけて行ってもいい。本人や家族が働きかけてくれないことには始まらない、と思うのだ。

〈備忘録〉

１月２８日（火）

９：５５　関空発→クアラルンプール経由→２１：５５ダッカ着

アライバルビザの取得は、ヤスミンさんが「招待」の文書を作ってくれていたのでスムーズ。

深夜にいつものホテルに着く。

１月２９日（水）

ヤスミンさんの紹介してくれた小学校を訪問。鉛筆をプレゼント。公立の学校でも、教育環境はとても悪い。２５０人ほどの生徒に先生は７人だけ。１・２年は午前２時間だけ勉強して帰る。午後は３～５年生が勉強。机もぼろくて教室は暗い。

＊小学校訪問の時に、奨学生のノヨンが友だちを連れて来ていた。彼は、その友だちをミナコ奨学生にさせたい意向らしい。仮に彼の推薦で採用されることになったら他の子らからも次々頼まれることになり、不採用になれば彼が責められることにもなる。奨学生の推薦は、親あるいは学校の先生の推薦が原則。

ナワブゴンジュの奨学生に会う。面接をしながらクジャクの折り紙をする。

夜、ホテルにジョニさん、カディジャさん夫婦が訪ねて来てくれる。カデイジャさんはＮ３合格。ダッカで日本語学校の先生をしている。今秋には半年間、日本に来て日本語教師の資格を取るための勉強をするそうだ。ジョニさんは、自分の田舎に小さな学校を作る夢を持っている。２年先の実現を目指している。学校を作るための費用は自分たちだけで賄う。他の人に頼れば、自分たちが理想とする教育を貫くことができなくなる、というのだ。二人は純真。夢を実現させられるように応援してあげたくなる。

１月３０日（木）

午後、シアタースクール訪問。途中、バカでかいスケールの国際バザールに立ち寄る。男のぼくには興味なし。

シアターの奨学生はだんだん少なくなって６人。カレッジに行っているリピは、兄に結婚を勧められているそうだが、自分の人生は自分で決めさせてあげたい。大西さんが奨学生との面談をしている間、陽子さんが新聞でエコバッグ作りをする。

病気のアキさんが心配だ。元気な笑顔を見せてくれていたが、頭に腫瘍ができている。薬が効かない場合は手術も必要だという。こんな場合には、教育支援が原則とはいえ、病気治療のための支援もしてあげられたらと思う。

１月３１日（金）

コミッラへ移動。いつものラジョンさんの運転ではないので、わざわざジョニさんとカディジャさんが同行してくれる。ぼくらはスタディツアーの間、事故がないように守ってもらっているのだ。

タリクさんのマンションでは、ロケアの後にショティーがメイドさんになっていた。

夕方、コミッラの町を散策。新一年生用のランチ皿とコップをいつものスーパーで買う。町の通りはヒンドゥー教のお祭りでにぎわっている。バカでかい音響をひびかせて、トラックの荷台に乗った若者たちがはしゃいでいる。

夜、タリクさんがイスラムの教えについて話をしてくれる。そのあと、日本人はどんな宗教を信仰しているのかと問われた。以前シアタースクールの子から同じ質問をされて困ったことがある。神は信じないが、人として決して尊大にならないよう、大自然の中で生命を与えられていることを謙虚に受け止めて生きることを信条にしている、という内容を大西さんに伝えてもらった。タリクさんは苦笑いをしていたが、心の中ではきっと傲慢不遜な人間だと思っていたのだろう。(通訳してくれた大西さんによると、タリクさんは神についての考えが違うだけ、決して傲慢だとは思っていない、ということだけど……)。

２月１日（土）

ワンドロップ小学校訪問

生徒全員に新しい制服を配る（制服はタリクさんの支給)。小野中学校の生徒らが集めてくれた上着は８０着。制服を依頼している業者がサイズごとに生徒を並ばせてくれて手際よく配布できた。冬の時期の朝晩は冷え込むので、とても喜んでもらえた。５年生の分はなかったが、その代わり、別の日に一人１００タカずつあげて、スーパーマーケットで買物体験をさせるプランを立てた。

昼食は、ラブリー先生が毎日作ってくれている。子どもらがお腹いっぱい食べられるのがとてもいい。午後は、大掃除と入学式の準備、飾りつけ。上級生がよくやってくれる。

２月２日（日）

運動会と入学式

全員まっさらの制服を着てきれい。運動会は、日本の種目を一つ入れたが、他はみんな先生らが考えたバングラデシュの種目。日本のように整然としたものではない。進行もルールも付け焼刃で場当たり的。応援の席も決まらず近所の人も混ざりこんでいる。しかし、日本のようにがんじがらめの運動会よりものびのびと、ほのぼのとしていて、いいとも思う。

「白い上着をズボンの中に入れなさい。だらしない格好はだめ。」「応援席は学年ごとにまとまって座りなさい。」と大西先生は指示する。整然と行動することを教える必要もあるとは思うが、ぼくはどちらかというと統率からはみ出したい性格だから、ちょっとぐらいバラバラでもいいと思ってしまう。

ランチは、ご飯が大鍋二つ、カレーが大鍋一つで３００食。子どもたちは、いつものランチよりたくさんよそってもらって、その上にお代わりもして、びっくりするほどたくさん食べている。

入学式は、上級生が新入生を拍手で教室に迎え入れる。くす玉が、な

んとか割れてホッと。今回は、全校生が１年生を取り囲むように教室の周りに並んで祝福。とてもいい雰囲気だ。

２月３日（月）

５年生、新聞でエコバッグ作り（陽子さん）。このバッグを持って買物体験だ！

１年生、ブレスレットと紙飛行機作り（山中）。大西さんが絵本の読み聞かせをする（子どもたちの歓声がグランドにも響く）。

２年、３年は体育。尻尾取りゲームやゴム縄くぐりなど（岡さん、岡くんペアの指導でみんな大はしゃぎ）。

２月４日（火）

１限、身体測定と個人写真。生徒に個人カードを持たせてスムーズにできる。

２限・４限、体育。

５限、日本の小・中学生からの手紙に返事のメッセージを書く。

６限、４年で風車作り。

＊今年度のカリキュラムを編成しなければならない。２年前は浅田さんの頭脳があったから一晩で作成できたが、今年は浅田さんがいない。頭を悩ませていたが、アナスくんがプログラミングの才能を発揮して、１週間・全１５６コマの授業とその担当の先生を割り振ってくれた。

２月５日（水）

５年生の買物体験

最終学年の５年生全員が５つのグループに分かれ、ワゴン車とＣＮＧに分乗して行く。車に乗ることも、村から出ることも、お金をもらって買物することも初めての子らが、楽しい経験ができた。もしかしたら、一生の思い出になることかも知れない。ぼくのグループは、ティンニ、サニア、ブリスティ、アスマの４人。日本人のおじいさんを気づかって手をつないでくれる。照れくさいけど、うれしかった（笑）。この子らが買い物できるのかと心配したが、お菓子屋さんや文房具店で、お店の人としっかりとやりとりして、値段の交渉もしている。たくましい。

午後４限、４年でもエコバッグ作り。難しい作業だけど、なんとか上手に仕上げることができた。

夜、タリクさんの友人のマンションに招待されてディナーをいただく。

２月６日（木）

ランチのあと、いよいよお別れの日。

ヤスミンさんの英語の授業。先生方には教授法のよい勉強になっているようだ。

４年と５年は、ドッジボールやヨガ（陽子さん）などを楽しんだ。

ランチのときにクジャクの折り紙を（２年～５年）配る。（１年生

には入学式の日に、特別に金と銀のクジャクをプレゼント)。
　各クラスを回って、バイバイの挨拶。帰り際には、みんなが校舎の窓から顔を出して見送ってくれる。感受性の鈍いぼくも、ちょっとほろっとする。
　午後５時、ダッカのホテルに戻る。
　陽子さんは列車でラルモニルハットの友人に会いに行く。一人で夜の列車に乗るなんてすごい人だ。最後の夕食は、ダッカの街なかのレストランでシシカバブの肉料理を食べる。肉がいっぱいで食べきれない。４人で約 6,000 タカ。

2 月 7 日（金）
　１２：３０　ダッカ空港発、クアラルンプール経由で、翌朝（2 月 8 日）５：４０　関空着。

＊ぼくは今回で 11 回目のスタディツアーになる。バングラデシュでは事故や病気、何があってもおかしくないと思われるのに、これまでたいした事故もなく無事であるのが不思議なくらい。タリクさん、ヤスミンさんらにがっちり守られているおかげだろう。本当にありがとうだ。

（山中 勇）